

# 報道最前線から故郷の校長に (1)

NHKラジオ  
明日への言葉  
2012年8月21日

山形・朝日町立大谷小学校 校長 長岡 昇

長岡 昇

1953年、山形県朝日町生まれ。現在59歳。1977年東芝入社。78年朝日新聞社入社。静岡支局、横浜支局、北海道報道部などを配属後、ニューデリー支局長、外報部次長、ジャカルタ支局長、2001年・論説委員、フォーラム担当部長を歴任。

担当のアジア情勢の社説を書くため、気候の激しいインドネシアやアフガン取材するうち水と緑に富んだ日本の農村の豊かさを痛感した。一方、古里に荒れた田畑が広がり、母(84歳)の守っていた畑が数少ない農作地だった。『ひどいことになってる』何とかしたいとの思いを募らせていた時、校長の公募を知った。

次の社会を作る教育の仕事に、記者との共通点を感じた。『生活を壊したくない』とないて嫌がる妻をなだめ、半年間、説得した。2009年1月に56歳で早期退職。民間人校長として同年4月から故郷の朝日町大谷小学校校長。

朝日町大谷小学校

〒990-1304  
山形県西村山郡朝日町  
大字大谷1147



元朝日記者の民間校長(59歳)が出版  
「未来を生きるための教育」

記者時代はアジア担当としてアフガニスタン紛争、イラク戦争、スマトラ沖地震などの取材に取り組んでいた。1989年、アフガニスタン紛争取材中に、ある難民にであった。そのお爺さんが言った言葉が「命は幸運の結晶」。この言葉が頭にこびりついている。

お父さんとお母さんがたまたま出会って、健康で君が生まれた。そのお母さんは、お婆さんがお爺さんとたまたま出会い結婚、健康で生んだ子だ。ひい爺さんも同じだ。「数えきれないほどたくさんいのちが幸運にも生き永らえていのちを君につないできた」沢山の命が受け継がれ今の君はいる。「命は幸運の結晶」といわざるを得ない。

「命は幸運の結晶」を学校経営の柱にしたいと思った。サブスローガンは「夢に向かって前進する親子」

記者で20年近く、論説委員で6年ほど、いつも現場の人だった。

自分が記者時代、住んでいたインドでの宗教暴動の取材は印象的だった。ヒンズー教徒と少数派のイスラム教徒とのいさかいで、実際はヒンズー教徒によるイスラム教徒の虐殺だった。そういう悲惨な現実をインドでは隠そうとしない……

新聞社を退社後、80歳をすぎ年老いた母の住む山形で職探しをしたが、大変難しかった。たまたま民間人校長の募集があつて応募した。

応募小論文は「私が考える学校生活」(その内容は、①土と緑に目をむけよう ②異なる人達と生きてゆく多様性 ③繋がっている世界を見つめよう)

故郷に戻った時、母から「新聞社でなにか不祥事でも起こしたのか？」と聞かれた。

現在、校長をしながら書くこと(物書き)は継続している。500世帯くらいの学区に月2回、「学校便り」を配っている。

学校の第一印象、平成11年完成の校舎では、きちんと学校運営がされていた。全校生徒89人、1学年1クラス。

校長になって先ず89人の子どもたちの名前を覚えることから始めた。2ヶ月かかった。

世間で問題になっている

- ★ 給食費未納 0
- ★ 不登校児童 0
- ★ モンスターペアレント 0

は全くない。町も教育に熱心。この地域は3世代同居が多く、古き良き日本がまだ残っている。

先生同志は〇〇先生とはいわず、〇〇さんと呼び合うようにしている。給食は全校生徒と教職員と一緒に食べている。生徒の作った野菜(ピーマンなど)も含まれている。

5、6年生の宿泊体験は隣町にテントをはった。24、5人で、古代人の火を起こすことから始まって、カレーづくりは教えず自分たちで作らせた。子供達は火を起こすことの難しさを理解した。

一番興味を覚えた話は、卒業式のあり方を変えたこと。従来の卒業式は先ず来賓への挨拶から始まっていたが、来賓への挨拶は一番最後にして、優先順位をその日の主役である卒業生、保護者、在校生、来賓の順にした。卒業証書も一人一人に語りかけながら手渡した。